【地域畜産振興部門　特別賞】

「ふるさと牧場」が試みる新しい農山村の結（ゆ）い

―アグロフォレストリー（耕畜林複合）を里山再生の切り札に！―

山口県防府市大字久兼
「ふるさと牧場」と支援グループ「こぶしの里牧場交遊会」（こぶしの会）

１　地域の概況

１）防府市の概要とふるさと牧場の位置

「ふるさと牧場」のある山口県防府市は、山口県の南部、瀬戸内海沿岸のほぼ中央に位置しており、一級河川佐波川が流れる防府平野に中央部がある。気候は温暖で、比較的雨の少ない瀬戸内海型気候である。

図　防府市の位置（防府市ＨＰから）

人口は11万6597人、４万6632戸を要している。

交通は、市内を東西に、国道２号線、山陽自動車道、ＪＲ山陽線が貫き、海には重要港湾があり、商工業が盛んで、臨海部には工場や物流基地が立ち並んでいる。

防府市の農業人口は5091人、2888戸（うち自給的農家1461戸、専業農家387戸、兼業農家1040戸）となっている。

総土地面積188.59k㎡、耕地面積1323ha、うち水田1239ha、畑36ha、果樹48haとなっている。

平成18年度の農業産出額は約26億1000万円で、産出額が多い順に水稲（約11億円）、野菜（約６億円）、畜産（約４億円）、花（約３億円）となっている。

平成21年の畜産農家戸数は、肉用牛飼養農家16戸、酪農７戸、養豚１戸であり、飼養頭数は、肉用牛1078頭、乳牛244頭となっている。

「ふるさと牧場」は市北部に位置する大平山（631m）の北側、佐波川の支流が流れ、棚田が広がる久兼地域集落の一番奥に位置する。久兼地域は、山口県棚田20選に選ばれた美しい景観が保全されているところであるが、農林業従事者も高齢化が進み、都市近郊型第2種兼業農家がすべてであり、専業農家は「ふるさと牧場」だけになっており、耕作できなくなった棚田も散見するようになってきた。

２）防府市　生涯学習都市宣言

平成12年10月、防府市は生涯学習推進協議会を中心に、市民がどこでも誰でも関心のあることを学ぶことができる生涯学習都市宣言を行い、市内の在住のボランティアを登録し、多様な学習ができるようになっている。

私（「ふるさと牧場」代表：山本喜行）は、県から指導農業士に認定され、農林業の指導を行うとともに生涯学習指導者としても登録しており、教育委員会や青年会議所主催の野外活動等の受入も協力している。

２　地域畜産振興活動の内容

１）地域畜産振興につながる活動・取り組みの具体的な内容

（１）ふるさと牧場経営のあゆみ

棚田に放牧した牛と母屋

⑴就農に至るまで

私は昭和20年に農家の長男として生まれ、大学卒業後、公務員10年、レストラン経営10年を経験しながら、自らが５代目となる山本家と所有する山林30haと棚田1.3haを有効に活用するための手法を模索していた。

社会経験の中で、自然を相手にする職業に就く夢を捨てられない気持ちから30歳でパワーショベル（ユンボ）を購入し、仕事の合間に林道の造成と植林を行ってきた。平成２年に林業と畜産、棚田米生産の複合経営に取り組み、専業経営となった。

⑵牛の導入経緯

畜産はレストラン経営時に市場で仕入れた交雑種ヌレ子の育成販売から取り組んでいた。当時自家野菜を利用する一方、野菜屑を持ち帰り牛の餌にしていた。その後和牛妊娠牛を購入後、和牛繁殖と子牛育成に切り替えた。平成３年「山口県水田放牧事業」を活用し、放牧牛舎（６頭用）を建てたが、作業は一人でユンボを使い、林業部門の間伐材を活用した。和牛は血統を考えて保留していく必要があることを学び、授精をお願いしていた畜産農家から優良血統の廃用牛を購入し、放牧により発情を復活させ、市場性のある精液で生まれた雌子牛の保留を積み重ね、現在自家産９頭の繁殖雌牛となっている。

⑶林業の経緯と混牧林放牧

林業は、ユンボを活用し２㎞、10haに林道を伸ばしつつ、ヒノキを中心に植林を行った。

表1. 植林の推移

年次	面積	内容
H2～H3	1.6ha	ﾋﾉｷ（一部ｽｷﾞ）普通植林
H4～H8	7.4ha	ﾋﾉｷ（一部ｹﾔｷ・ｸﾇｷﾞ）ﾏﾂｸｲﾑｼ対策事業
合計	9.0ha	

植林後の雑草の繁茂は面積が広いだけに下草刈り作業は大変な重労働であった。そこで、春から秋にかけての下草刈に牛の放牧をやってみると牛はヒノキをわずかしか食べず、雑草を舌草刈していった。林間放牧については、山口大学農学部がフィールド調査を実施し、放牧とヒノキの食害について、思っていたほど被害は少ないことを確認している。

私の林地は市有林と境界を接することから、防府市の委託を受けて地域の境界線整備を行っている。こぶしの会員と共に年2回境界の切り開き作業をしながら50haを管理している。

⑷稲作・畜産・林業の複合経営

繁殖和牛を始めると稲ワラが必要になり、しばらく休んでいた棚田(1.3ha)での稲作を復活させた。里山に連なる棚田は全て自分の名義ではなく他人名義の棚田もあるが、すでに農業は行っておらず私が管理しており、周年放牧地としている。結果、棚田での稲作と林業に畜産（牛力）を活用して組み合わせた複合経営を実践し、稲作は単年度所得、畜産は２～３年周期の中期所得、林業は30年以上の長期所得と位置付けている。

⑸牛力を仲立とした多面的機能

複合経営を持続可能な方法とするには畜産（牛力）を利用して稲作と林業を結びつけることが重要である。

・牛と水田の関係；雑草利用（畦草・石垣の草）、糞尿（放牧時）や堆肥提供、稲ワラ利用、水田裏放牧、水田裏飼料作

・牛と林業の関係；舌草刈、糞尿による施肥効果、牛道による作業道づくり、間伐材牛舎、被陰効果、水飲み場

いずれも牛力が仲立ちとなっている。持続的な複合経営は、さらに多面的機能を発揮する。

多面的機能とは、①生産の場、②実地研究の場、③実地研修の場、④都市と農村交流の場である。放牧を活用することが低投入・省力化を実現するとともに、環境保全や景観保持を可能とし、人が集まることで情報が集まり、さらに活動内容を発信することが可能となる。

（２）研究の場から研修の場へ（地域ボランティアも研修の一部）

「ふるさと牧場」が実践する耕畜林複合経営は、アグロフォレストリーの実践としても知られはじめ、山口大学農学部小澤教授（当時）が植林地放牧の実地研究を実施したこともあり、県内外から多くの畜産関係者が訪れるようになった。

また、各大学の学生は視察だけではなく数日間宿泊しての研修を希望してくるようになり、可能な限り受入れを行ってきた。

表2. 大学生の受入れ（後日取りまとめ報告書が届いたもの）

年次	大学	人数他
H15.3.12～18	広島大学教育学部	2名
H15.7.4～6 8.13～17	東京農業大学	2名
H15.8.22～29	広島大学生物生産学部	3名
H15.9.12～15	広島大学生物生産学部	2名
H16.3.10～18	東京農業大学	6名～10名
H18.9.20～25	広島大学生物生産学部	2名
H19.3.22～27	近畿大学農学部 広島大学生 生産学部	2名 1名

この他にも山口大学農学部・文学部、武庫川女子大学、岩手大学農学部など、なぜか女子学生が多く、元気もある。農林業体験研修は基本的に周年いつでも可能であり、季節の作業を体験するとともに、山を歩きながら、ふるさと牧場の経営方針を紹介してきた。彼女たちは、数日間宿泊し、多いときは10名近い学生が一度に研修を行ったこともあるが、すべてをここだけでの研修で終わるのではなく、集落にあるお寺での清掃作業や一人暮らしの高齢者のお宅へ出向いての庭の草取りと話し相手、さらには夏休みに研修に来た学生には集落の盆踊りへ参加してもらうなど、地域の方への貢献も研修の重要なメニューとしている。

表 2-1. その他研修の受入れ

年次	所　属	人数他
平成14年度～	地元小野中学校	毎年2～6名が2泊3日で研修
平成21年～	県内農業高校（県依頼）	毎年2名が5日宿泊研修
※　食事の用意が必要（妻へも負担となるが人材育成のため貢献）		
平成14年、15年	周南市立周陽中学校	各38名、37名が1日体験学習
H16.7.31	県立日置農業高校	7名　農畜林作業研修
H17.5.8	山口農業高校	5名　農畜林作業研
H20.9.10	山口農業高校	15名　農畜林作業研修
H20.10.25～26	山口市二島子ども会	30名　宿泊体験
H22.4.11	山口市二島ボーイスカウト	15名　体験学習
H20.1.26	周南市福川こどもクラブ	26名　体験学習
H20.11.8	同	20名　体験学習
H22.8.23～24	同	60名　宿泊体験学習

（３）牛が管理するレクリエーションの場

⑴植林地でも花の咲く木は残す

私は、植林を行う前の雑木伐採において、辛夷（こぶし）、山躑躅（ヤマツツジ）、椿、ツルア

ジサイなどの花を咲かせる木をできるだけ残し、ヒノキとの混生となる植林を行ってきた。当時、植林の補助事業を受ける際には行政担当者の理解を得られないこともあったが、林業だけを目指すのではないことを説明し、理解をいただいた。その結果、数年後からは、花の咲く鑑賞木が混じる景観が広がりはじめ、心安らぐ空間となっている。林道も重機により広く整備し、排水もきちんとしている。

⑵裸地化対策はノシバ

ふるさと牧場の全景

林道面積は1.5haにもなるが、土質は真砂土であり、雨のたびに土砂が流出していた。必要な所はコンクリートで固めたが、全てをするわけには行かない。そこで、学生の研修時など人手がある時を活用して、山口県畜産試験場から斡旋のあったノシバを数年かけて植えていった。ノシバは牛の嗜好性が良いものの、根株まで食べることはなく牛の放牧により数年で広がり、夏でも背の高い雑草が無く歩きやすいトレッキングコースとなっている。

⑶美しい景観を開放

混牧林を継続してできた景観を見て、多くの方が立ち寄るようになった。ふるさと牧場は防府市の観光地大平山の裏手の市道（現在林道）沿いにあるため、一般市民、特に小さい子を連れた親子が「牛を見せてください」と立ち寄ったり、山を散策するなど、市街地では見ることの少なくなった家畜とのふれあいを求める人も多くなっていた。

（４）こぶしの里牧場交遊会の発足

⑴きっかけはコブシの花見会

里山の景色は四季を通じて変化するが、特に４月上旬のコブシが満開の年は山一面が白くなるほどであり、毎年バーベキューをしながら花見会を行い、参加者も100名近くになることもあった。毎年参加している有志の中から「ふるさと牧場」の取り組みを支援しようという声があがり、平成12年８月、「こぶしの里牧場交遊会」（以降「こぶしの会」）が発足した。呼びかけは植林地での放牧調査研究を行っていた山口大学教授と農林事務所職員であるが、地元の方、畜産農家、関係機関・団体職員、大学・高校の先生、サラリーマンなど、多様な賛同者が集まり、発足の会では、アグロフォレストリーによる里山保全の理解とPR、実践者の育成、グリーン・ツーリズムの実践など、これから過疎化が進む農山村で求められる活動内容を夜遅くまで話し合った。

⑵継続させるための遊び心が生んだ茅葺交流ハウス

具体的にどうするかを考えると、どれも一朝一夕に出来るものではなく、継続することが基本であり、会員も遊びを交えて楽しめる技術習得や交流の場になることを基本とした。

建築途中の茅葺交流ハウス

さらに、私の家ではなく、会員が気軽に集う場所・交流ハウスも必要であり、里山の間伐材を提供することとした。屋根は茅葺きで囲炉裏も・・・、と提案はたくさんあったが、ここで確保できない茅は大平山や近隣の耕作放棄地へ出かけみんなで集めることとした。安易に補助事業に頼るのではなく、会員の技術向上にもなることを踏まえて、できるだけ自力で建築することを決めた。夢は大きかったが、間伐材を１本倒して、皮を剥くだけでも１日のイベントになるほど時間と労力がかかることとなった。この時も私の林業技術と重機が大いに役立った。

⑶職人から学ぶ伝統技術（大工、左官、茅葺）

職人のボランティア依頼は難しかったが、交流ハウスの主旨を説明して、柱の設置や土壁の竹小舞技術など、必要なところは地元の大工や左官屋さんに教えてもらった。茅葺きについては、隣町の80歳の職人に15日間指導をお願いし、片屋根の作業を通じて茅葺き技術を教えてもらった。茅葺は数種類の簡単な道具を使い、竹とワラ縄だけで葺いていく作業であるが、縄を縛る男結びの繰り返しは辛い作業であったが、会員も次第にできるようになり、残りの屋根は自分達だけで葺くことができた。作業の途中で茅が無くなり、急遽近郊の耕作放棄地の茅を刈に行くこともしばしばであった。会員は自分の勤めがあるため、週末限定の作業であり進捗状況はゆっくりしたものとなり、結局、床と囲炉裏を設置し、集える場となったのは平成21年であった。

⑷いろいろな職種の会員

会員数は、当初は40名の登録があったが、作業まで継続する会員は限定される。いろいろな職種の方が入れ替わりつつ、作業が継続していったのが現実である。しかし、一度でも作業に参加してくれたことでも嬉しいことであり、何かの機会にまた訪れることを願っている。

現在中心的に活動しているのは、団体職員、公務員、鉄工所経営者、建築会社経営者、陶芸家、地域の水田を借りて稲作や野菜作りをしている農家であり、もちろん私も妻も会員である。常に参加している方々が増えていくことは嬉しいことだが、何かの折に連携できる方も貴重な会員であり、県外ではあるが、放牧関係の研究者、元大学教授、さらには岡山県で林間放牧を開始した元公務員の女性もいる。

（５）「ふるさと牧場」と「こぶしの会」の連携による活動の広がり

⑴ふれあい体験交流活動（牛とのふれあい、野外調理に竹加工）

ＨＰ「ふるさと牧場」で「こぶしの会」の活動記録を見ると、作業中心に見えるが、「ふるさと牧場」へ依頼のある体験活動のサポーター役としても経験を重ねている。

平成17年からは、ふれあい体験交流受入牧場として、山口県畜産振興協会と連携し毎年「里山で牛とのふれあい体験ツアー」行っている。

親子ふれあい体験　里山散策

一般公募により毎回数組の小学生親子が参加している。内容は、私の飼っている和牛登記証を使った和牛のお話しから子牛とのふれあい、測尺、さらには鼻紋採取体験などを協会登録担当者が行うとともに、林間放牧されている子牛の母牛を探す体験も好評である。食の体験としては、棚田米を野外炊飯し、参加者が食べる器や箸は竹を加工して作るなど、親子で汗をかかないと食べられない工夫もしてある。さらに、ドラム缶風呂や宿泊体験など、他ではできない体験を提供している。

⑵親子で一年を通じた農作業体験！「田んぼの学校」開校と意外な効果

平成18年からは、会員の提案により「田んぼの学校佐波川」を開校している。内容は、小学生親子に棚田でもち米を作る体験を組み、塩水選、籾蒔きから始まり、田植え、夏の草取り、稲刈り、脱穀、臼挽き、そして12月の恒例イベントに定着した餅つきで１年の体験を終了する継続参加型の体験受入を行っている。当初は一組の参加であったが、平成22年の籾蒔き作業時には11組と増えている。参加者の口コミやふれあい体験ツアー参加者がリピーターとなるケースも多くなっている。

・意外な効果その１（会員が棚田で生産開始）

田んぼの学校活動でのサポート経験を踏まえて、週末だけの作業ではあるが、自分が管理する棚田を決めて、お米を自ら生産する会員が出てきた。日々の水管理や肥料代、田植機・バインダーや燃料は「ふるさと牧場」が負担しているので、生産したお米であっても同じ値段で玄米を販売している。「ふるさと牧場」としては多少とも手間が省けたとして、その分の差額を計算し、「こぶしの会」へ寄付している。まだ３名の取り組みであるが、生産と消費を直結させるシステムとしての先駆的に挑戦している。

・意外な効果その２（参加者も支援）

田んぼの学校等へ毎回参加する親子は、子供たちが里山を自由に遊びまわり、服を泥だらけにしてイモリを捕まえる時間と空間に同じような価値観を持っており、嬉しく思っているが、さらに、参加するだけから活動を始めるお母さんが出始めている。ここでの作業体験参加は弁当持参

参加者が企画したお菓子作り

であるが、料理上手なお母さんが手作りのお菓子を参加者へ披露することから発展し、子供たちが遊んでいる間の料理教室を実践している。平成21年12月の餅つきイベントでは、クリスマス用ヘキセンハウス（お菓子の家）づくり教室を行い、平成22年３月の椎茸の菌打ち体験の時は、近くの酪農家から生乳を分けていただいてチーズづくり教室を行った。その多才なお母さんは、７月には里山の野草を使った草木染め教室も行い、ほぼ固定してきたメンバーたちは、上手に仕上がれば「ふるさと牧場」の特産品になることも目指している。

（６）多様な情報発信

⑴活動内容は広くＰＲ（ＨＰ、情報誌、マスコミも）

「ふるさと牧場」と「こぶしの会」が行う活動内容は、「こぶしの会」事務局が管理するＨＰ「ふるさと牧場」や田んぼの学校会員の「久兼の里」、さらに、参加者のブログなどからも紹介をしているようである。

山口ケーブルテレビの取材

私からの情報発信は、中央畜産会に投稿した「21世紀に向けた農業革命」（畜産会経営情報）や土地利用型畜産の再生・定着を提唱していた農林業ジャーナリスト増井和夫氏（故人）の取材を受けての山口県草地研究会創立30周年記念誌へも投稿の他、多様な雑誌の取材、テレビ等のメディア、各地からの講演依頼を活用して、自分の哲学も語りながらアグロフォレストリーを紹介し、「こぶしの会」と連携した活動も紹介した。バラエティー番組であっても、タレントさんをも煙に巻きつつ、アグロフォレストリーを紹介していただいた。さらに、平成15年から開催されている「山口県むらまち元気交流会」や全国放牧サミットや棚田サミットなどへも積極的に参加し、情報交換にも努めている。

⑵大学で非常勤講師（学生の意外な反応）

さらに、数年前から山口大学非常勤講師も引き受け、毎年５月に全学部1年生を対象とした講義を１回引き受けている。平成22年５月18日には、「環境と地域共生」をテーマに「山口県の林業」を中心に講義を行った。今回も100名以上の学生が対象であり、一人での語りも辛くなってきたので、「こぶしの会」会員と協力し、私が林間放牧や林業の話を語り、会員は「ふるさと牧場」で展開している各種活動を紹介した。大学１年生から想像すると、受験勉強や部活しか経験の無い学生に林間放牧や里山体験が理解できたのか不安でもあったが、後日学生のレポートの採点を行い、多くの学生が自分の出身地の山林の現状など考えたこともなかったことに気づき、行政支援や森

林ボランティアなどの取り組みをＨＰで知ったようであった。さらに、「自由な時間がある学生の時に、農山村体験をしてみたい」という感想を書いた学生がかなりいたことは、現在の農林業の課題である過疎化対策として、地域からの情報提供がまだまだ不足していることを実感するとともに、小学校から大学までの教育過程において、地域の一次産業を体験する機会がもっと必要であることを感じている。

２）当該事例の活動目的と背景

（１）「ふるさと牧場」の経営方針

⑴心にゆとりのある経営とは

私たちは現在夫婦二人暮らしであり後継者はいない。今は農畜林複合経営による収入が基本であるが、私が専業経営となった当時は、妻には勤めを継続してもらい、私も牛力を活用するアグロフォレストリーにより体に負担を掛けず、仕事に追われない手法を実践し、余裕のある暮らしと老後の年金がしっかり確保できることを基本としてきた。若い時に、サラリーマンの傍らユンボで林道作業をするときは、昼ごはんもそこそこに道を築いていったが、体力に任せて無茶をすると人生の後半にお釣りをもらっては何をしたのかわからなくなる。

⑵アグロフォレストリー実践の生活収入の内訳（林業副産物は牛が育てた花シバ）

①子牛販売収入：私の飼育方法は林間放牧に適する牛作りを基本としており、山に登れる身軽な牛の体型を理想としている。販売する子牛も粗飼料主体の育成方法である。年間４～６頭の販売で市場平均よりは下回る価格であるが、収入の主体である。

②副産物収入：これまで２番目に多い収入は米売上であったが、ここ数年は林業部門である。ヒノキはまだ販売できないが、毎年注文が増えているのは、植林地の広がっている花シバ（シキミ）である。植えた訳ではないので正確には林業副産物であるが、これは、中国地域においては、正月、盆、春と秋の彼岸の墓参りの際に花と供えて供養をすることから、年４回の安定した収入源となっている。花シバは毒性があり、牛は花シバを避けて下草や巻き蔓を食べ、施肥まで提供してくれるため、その面積は年々広がっている。

植林地放牧と花シバ

③米販売収入：米は固定客への販売が中心である。苗床づくりから行い、除草剤と肥料を利用する程度の栽培方法であり、はぜ掛けによる天日干しを基本としている。従って、機械装備も２条田植え機、２条バインダー、ハーベスターなど最小におさえ全て中古である。田んぼの土づくりは、牛が水田裏作に放牧される棚田以外は、牛舎のボロだしを週に数回、一回に一輪車１台分を運び、薄く散布する程度である。

④間伐材は材料代：植林をしたヒノキによる収入はかなり先のことになるが、間伐材が交流ハウスの骨組みとなり牛舎の柱にもなることから間接的に畜産部門や活動のために貢献している。

⑶林間放牧の手法（牛は山仕事の友。自らも余裕）

植林地の管理は放牧牛が下草刈を継続していることから、私の作業は茨の除去など最小限で済ませることができ、牛を見る傍ら枝打ちや間伐作業も安心して継続することができる。これまで、一人で山仕事を継続してこられたのは、人が入りやすい里山であったこともあるが、牛と一緒に山を歩きながらの枝打ち作業だったことは心強いものであった。

冬の堆肥散布

私の放牧方法は、周年放牧を基本とし、離乳（３カ月）後の母牛は、放牧牛舎へ移り、ここでは朝と夕に飼料給与（稲ワラ、乾草、ふすま、トウモロコシ程度）を行い、夕方には必ず牛舎へ帰らせ行動範囲をセーブするとともに、発情発見、人工授精、健康管理を確実にしている。

牛力を活用した耕畜林複合経営は、結果的に無駄の少ない合理的な手法となっており、大きな投資も必要なく返済に追われることのない心身ともに健全な経営となり、学生の受入や「こぶしの会」との連携活動をする余裕を持っている。

表３．「ふるさと牧場」畜産部門の基礎数値

項目	H19	H20	H21
成雌牛飼養頭数	9.1頭(内未経産2.1頭)	7.8頭(同1.1頭)	9.8頭(同2.6頭)
分娩頭数	8頭	3頭	9頭
出荷頭数	4頭	6頭	4頭
平均分娩間隔	14.3カ月	11.3カ月	14.1カ月

（２）個人での受入れから「こぶしの会」との連携による多様な受入と対外活動へ

⑴牧場に人を受け入れるきっかけ

「ふるさと牧場」には、ドライブの途中に牧場の看板を見て立ち寄る若者や親子連れが多い。嬉しそうにイモリを捕まえている子どもを見ているお母さんから「よそでは畔が崩れるから田んぼに近寄るな！と叱られた」と聞き、同じ農業者としてがっかりするとともに自分は多くの消費者を受入れるべきだと決めた。そのために防府市生涯学習ボランティアへも登録し、農業体験の受入れなども積極的に行ってきた。

⑵会員との関係（共に学び、技術向上を高める連携）

「こぶしの会」メンバーは多様な職業であり、多くは消費者側となるが、「ふるさと牧場」での

活動を通じて、多くの語らいから私の思いを理解し、現在の農山村が抱える課題を実感し、その背景となっている「人の空洞化」の解決方法を議論することがある。私が実践しているアグロフォレストリーを基本とすれば、農山村での暮らしも可能であるし、将来、希望する人の受入方法も検討している。

「ふるさと牧場」の手法や技術に加えて、農山村の生活維持に必要となる伝統技術も楽しみながら学ぶことで、私も会員も生産活動から暮らしの維持に必要な多くの技術を身につけてきており、お互いが良好な連携になっている。さらに、外部からの作業体験、体験学習の依頼も引き受けることを可能としている。常に活動している会員や親子は限定されてはいるが、人が集うことで、いろいろな才能や特技を持つ人が新たに参加するなど、人を活かす場を維持することで多様な受入と対外活動の広がりを可能にしている。先ずは、久兼地域において活動の本質を認知してもらい、関心を持ってもらうことも重要な目的と考えている。

⑶具体的な連携（情報発信、技術向上、役割分担、研修受入意志確認）

「ふるさと牧場」と「こぶしの会」の良好な関係とは、例えば、私はパソコンを使えないが会員がHPでの活動状況を更新しているし、講演依頼の対応についても、私が思いを下書きするだけで、会員が画像を使った資料やパワーポイントを作成してくれるので聞く人に解りやすく話ができる。

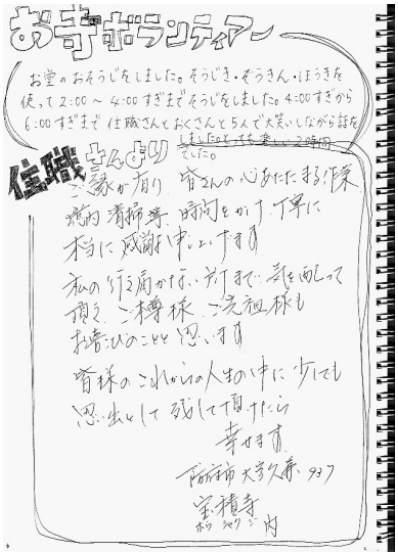
私は石垣を組む技術から棚田管理技術、林間放牧の手法など多種の技術を全て教えている。第３者から学ぶ茅葺技術などの伝統技術については、「ふるさと牧場」の経営だけであれば縁がなかったであろうが、「こぶしの会」活動があるから必要となった出会いであり、職人の技を作業の中で一緒に学び、共通の技術習得となることはお互いの成長となっている。

親子ふれあい体験においても、それぞれの持場で、和牛の説明や薪割り指導や竹加工指導が始まるように自然と役割分担ができており、多才なお母さんが、ここでやるから面白い野外料理などを次々と考えることで受入れる体験メニューも増えている。

学生の研修受入れは、ＨＰを見てメールで依頼してくることが多いようであるが、「こぶしの会」事務局が数回メールのやりとりをして意志を確認している。それから学生が直接私に電話をしてくることで研修が決定する。さらに、車を持たない場合は、ＪＲとバスで来ることを条件としている。バスは１日２本久兼までの路線があるが、廃線にならないようささやかな貢献をしているつもりである。

研修を終えた学生達が送ってきた実習の記録のほんの一部を紹介している。ここで学んだことが良くまとめられており、研修のときには直接聞けなかった感想も書いてあり、私の宝であり、受入れる側にとって目的達成を知る貴重な資料である。

中には観光牧場と勘違いして遊びに近い感覚で出迎えまで期待する学生もおり、ある程度学生の研修意欲を「こぶしの会」事務局で確認する役割も果たしている。



学生たちが送ってきた記録

（３）牛力を基本とした農山村に必要な新しい結いとは・・・

⑴農山村の課題、人の空洞化を埋める手段

今、農山村が抱える高齢化、過疎化、耕作放棄地や山林荒廃、さらには限界集落・・・、これは、農山村に起きている人の空洞化の結果である。日本農業の背景を考えると、これまで日本経済の余力で資材を輸入し、専業化、大規模化を図ってきたと言える。しかし、経済力の強さは、一方で農産物を安価に入手できる流通システムをも構築し、販売価格の低迷にもなっている。大規模化を図ることができない農山村では、販売価格低迷のダメージだけを受けており、ここでの所得向上を絶望的にしている。

「ふるさと牧場」では、黒毛和牛を畜力として用い、人の手や機械化を最小限に抑えながら里山を守っている。稲作・耕作（アグリカルチャー）と山林（フォレスト）を組み合わせた「アグロフォレストリー」の実践に牛の放牧は必須である。常に５～７頭の牛たちが約10haの植林地を歩き続け、草をはみ、樹木も花木も大きく育ち、棚田へ

親子でサツマイモ畑の草取り作業

も有機質肥料を提供している。その結果、耕作部門、畜産部門、林業部門それぞれを省力化しており、販売額が低くとも出ていくお金も抑えている。しかも、すばらしい景観を作り上げている。このような空間があるからこそ農林業の多面的機能を十分発揮できる基盤ができ、お金には変えられない価値を生み出している。

具体的には、これまで紹介してきた活動の結果生まれた人の交流である。週末だけでも「ふるさと牧場」へ通う会員やお母さん達の中からも生産活動へ参加したり、簡単な加工への取り組みも芽生えたことは、まさに、人の空洞化を埋める新しい手段といえる。

⑵お金では計れない体験の価値、さらに定住者も

平成22年の夏休みに子供たちを数日間ホームステイさせてもらう代わりに、秋の稲刈り後に牛用の稲わらをお母さんたちが集める計画がある。１日いくらで受入れるのではなく、子供たちが得た体験の価値を作業労働で払うシステムは、消費者の中心でもある母親に農作業体験をしてもらう絶好の機会となる。子どもたち中心の体験の場から、親も農作業体験を通じて棚田米等の生産過程や稲ワラ収集が牛の飼料確保につながることを学ぶことで、本当の農産物の価値を理解し、共同作業にまで段階的に発展すると考えている。

ここに定住を希望する若者も現れている。若くして結婚し、妻子もあるため、働きながら週末に通ってくる。将来は、まだ20haある山林の植林や里山に近い耕作放棄棚田への放牧拡大により頭数を増やすことも可能であり、「こぶしの会」とともに住居確保から収入確保を目指すことも模索している。

３）活動の成果

（１）混牧林放牧が里山や棚田にもたらす効果と実証

⑴混牧林放牧を生かす工夫

牛力を活用した植林地や棚田の管理については、これまでの工夫と成果を整理してみた。

表４.「ふるさと牧場」での混牧林放牧

場所	工夫	成果
林道全般	ノシバ植付け	土壌流出防止、緑の絨毯
竹林に接する林道	筍を食べる	竹の繁茂防止
植林地全般		雑草繁茂防止、花シバ繁茂
間伐の必要な植林地	列状（等高線）間伐	ノシバ利用によりトレッキングコースへ
食害のある植林地	ノシバ植付け	ノシバ草地化
牛道	ノシバ植付け	裸地化防止
棚田（水田裏放牧）	畔幅を１ｍ	糞尿散布、畔のモグラ防止、石垣草防除
棚田（周年放牧）	ノシバ植付け	緑の絨毯、石垣草防除

一方、牛力では解決できない実生の松や茨、臭いの強い雑草の繁茂は放牧牛の確認のついでに行える程度の作業であり、長い年月を重ねた結果、やすらぎを感じる空間を拡大しつつ里山全体

の保全能力も高めている。

⑵100年に一度の豪雨にも耐えた保全力

平成21年７月21日に防府市を襲った豪雨では各地で広範囲の土砂崩れが発生し、多数の犠牲者を出した。土石流に襲われた老人ホームはまさに、私の山の裏に位置している。おそらく同じ量の雨が降ったと考えられ、ここの林道も川となったが、市道から母屋への道だけは崩さないよう夫婦で悪戦苦闘した。

豪雨後沢沿いの崩壊

沢沿いの渓谷の一部や交流ハウスへ上がる道、棚田の一部が崩れ、大きな石や流木が流れ出し、しばらくはユンボでの復旧作業に追われた。しかし、いずれも一部の崩壊に留まった。特に、当日川へと様相を変えた林道では、牛の放牧により広がっていたノシバが絶大な効果を発揮し、林道のところどころに施工してあったコンクリートと同じ強度を保っていたと考えられる。専門家による検証を受けたわけではないが、事実としてノシバを活用した林間放牧の効果を知ることとなった貴重な経験であった。

崩壊部分については、夏から復旧に取りかかった。私がユンボを扱い、会員が一人でもサポートに来れば作業を行い、11月には交流ハウスへの坂道を復旧することができた。参加した会員も濁流で流れてきた大きな石を石垣に活用する技術を経験する良い機会となった。

（２）継続的な体験と遊びで封印された子どもたちの能力を発揮

⑴参加親子の変化（子供が仲良く、親も連携）

継続的な体験である田んぼの学校には、年々参加親子が増加している。子どもたちの年齢も年長さんから６年生まで幅広く、お母さんやお父さんもここで何度か顔を合わせるうちに交流が始まっている。

まず、子どもたちが仲良くなり、リーダー的な子を中心にグループで行動するようになる。共同でイモリやカエルを捕まえたり、川遊びや里山探検、交流ハウスでのかくれんぼなど、次々と遊びを作っている。初めはなかなか行動を共にできない子もいつの間にか一緒に遊ぶようになり、放牧牛を触りに行くこともある。さらに、野外調理を手伝ったり、薪割りや火おこしにも挑戦するようになる。最近は、たくさん汗をかいた後に、ドラム缶風呂へ入ることが大きな楽しみとなっている。

⑵子どもの能力発揮（仕事を与える必要性）

平成22年夏休みの子どもたちだけのホームステイでは、子供でも我が家のお手伝いをすることを基本とした。高校１年生をリーダーに小学校低学年が多い参加メンバーであるが、調理の手伝

いや五右衛門風呂の焚き付け、昼に刈り取った雑草を集めて牛に与える作業、そして後かたづけも自分で行う。家では食器洗い位しかやったことがないそうであるが、やり方を覚えると生き生きと動き回っており、時間は掛かっても必要な仕事をこなしている。お母さんたちも子どもの能力を活かす場が必要であることを再度実感している。

ホームステイする子どもたち

⑶グループでの体系的な学び

平成20年から毎年１回体験にやってくる活動グループがある。周南市の「福川こどもクラブ」である。幼稚園を経営している大野夫妻が地域の小学生を公募し、年間を通じて月１回の野外体験活動をしているグループである。このグループは山口大学のボランティアも受入れて活動しており、必ず年間のテーマを決め、体験計画を作り、体験後には必ずふりかえりを実践し、やりっぱなしの体験にならないように工夫している。ここ数年、林業をテーマに「ふるさと牧場」での野外体験を行い、間伐体験、林道整備（実生で広がる松の伐採）や植林（楓）を通じて林業の意味を理解している。「松の伐採を一日やりたい！」と感想を書いた子供は、自由に木を切る経験が無かっただけかもしれないが、体験を通じて子どもたちが日頃出す機会のない能力を引き出す良い機会となっていることは間違いない。

福川子どもクラブの松伐採体験

（３）活動継続の実績により補助事業も活用し受入体制強化

⑴活動実績から県補助事業利用へ

「ふるさと牧場」での各種活動の継続と情報発信により、行政サイドから補助事業活用の打診があった。平成21年度山口県棚田保全活動支援事業は、棚田を活用している集団に対し、必要な材料代を補助するものであり、おかげで、野外調理場、炊事場、ドラム缶風呂釜、茅葺き交流ハウス周辺の排水路を整備することができた。事業実施に当たり、「こぶしの会」規約も整え、会費徴収や交流ハウス使用規約も順次決め、仲良しグループから集団へ進化している。整備ができた後、平成22年５月に「防府市レオクラブ」から「竹の箸づくりとそば打ち体験」、山陽小野田市の活動グループから「タケノコ掘り体験」の依頼があり、一緒に交流することができた。

炊事場やドラム缶風呂が利用できることから、夏休みには会員親子の宿泊体験を実施し、小学生10名とお母さん２名が夜に出てくる虫と格闘しながら、楽しい一夜を過ごす体験ができた。

⑵中学校からの体験学習希望を教育と農林の連携へ

夏休み体験の様子

平成23年度、市内の中学校から農作業と宿泊型体験学習希望が来ている。中学生はそろそろ将来の職業も意識する年代であり、防府市の農林業体験を通じて理解することは、重要であるが、「ふるさと牧場」に丸投げではなく、防府市農林課等とも連携を取るなかで、体験内容を検討するよう投げ返している。多忙な先生には難題かもしれないが、教育機関との連携は地域農林業のためのキーワードとなり、そのために体験学習に理解のある先生が増えることを期待しているし、農林関係の担当者にも、教育委員会もここでの活動内容と子供たちへの効果をしっかり理解してもらいたいと願っている。

（４）久兼地域全体へ認知から全国への波及効果

⑴「こぶしの会」の地域貢献（道の保全、棚田20選、中山間直支継続）

「ふるさと牧場」は久兼地域の最も奥に位置しており、県道から車１台が通れるほどの市道を遡って辿り着くことができる。この市道は山沿いにあるため、竹や木々の枝が道へせり出している。地域自治会が実施する道沿いの草刈り参加者だけではすでに管理が困難になっていたが、自治会と話をして「こぶしの会」会員と私が夏前にせり出した竹や枝を刈り払い、快適な道となった。今後、毎年の継続を予定している。

また、平成 22 年３月に山口県は「やまぐちの棚田 20 選」を選定し、久兼の棚田も選定された。平成 22 年度に認定地域へ看板が設置されるが、その表記は「久兼上地区」（こぶしの里牧場交遊会）となっている。棚田は生産条件の視点から見ると採算が取れるものではないが、棚田の評価は、上質な米を生産し、多面的な機能を有する場であるとして、生産性以外の重要性がようやく認められつつあると感じている。今後、保全された棚田をＰＲするための各種活動が求められる。まさに、田んぼの学校等の継続的な交流活動が伴うことで 20 選に認められたものと受け止めている。この評価は、久兼地域の棚田米ブランド化へ波及する可能性もあり、地域全体への取組につながる一つのきっかけになればと考えている。

久兼上地区においては、中山間地域直接支払い制度の３期目も取り組むこととしている。「こぶしの会」も参加することで、今後増えてくる山際の耕作放棄地対策には、山口型放牧を活用した移動放牧による景観維持を広げていくとともに、若手会員も重機を扱い、崩壊した棚田の整備や条件の良い農地確保により、景観を保持した農業生産基盤を固めていくこととしている。

⑵会員から林間放牧への取り組みも（一人の取り組みから各地の農山村へ）

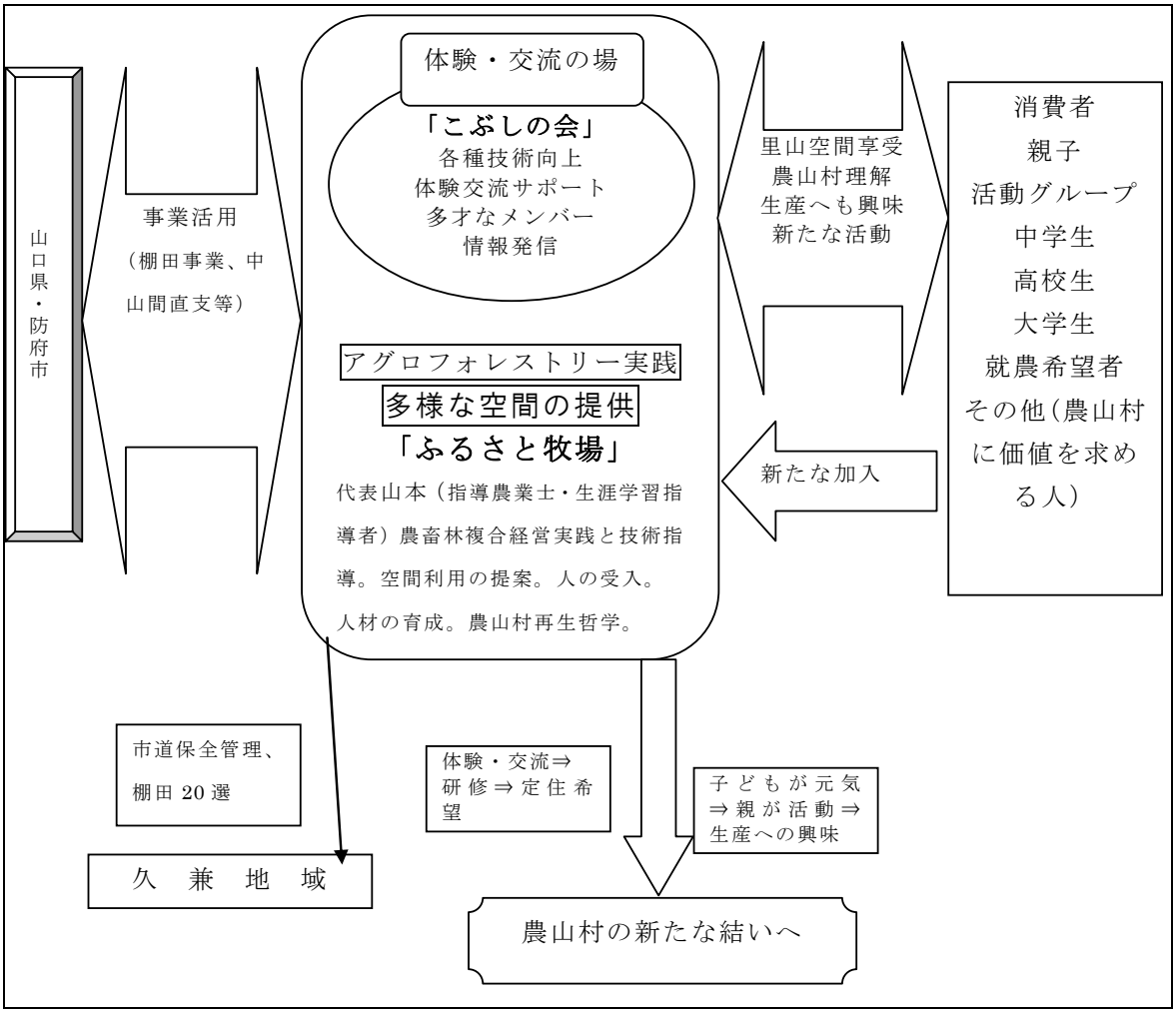
「こぶしの会」発足の前からここへ研修に来ていた広島在住の女性会員がいた。毎年一回程度遊びに来ていたが、その内結婚の知らせや出産の知らせが届くとともに、山林を購入して牛を飼いたいという相談をしてくるようになった。私もできることはしたいと思いつつ県外では、アド

バイスくらいしか出来なかったが、私が林間放牧の講演をした、岡山県新見市に家族で移り住み、念願の放牧を開始した。

岡山で放牧を開始した会員

一度「こぶしの会」メンバーと様子を見に訪問し、彼女なりの工夫で無理のない牛飼いを始めたことに一安心している。地域と良い関係を築いてもらいたいと願っているとともに、日本各地の農山村で混牧林放牧によるアグロフォレストリーを実践し、「こぶしの会」のような多様なメンバーが集まり交流活動が生まれてくることを切望している。

４）地域振興図



５）今後の課題

久兼地域では、「ふるさと牧場」に週末車が行き来することは良く知られており、様子を見に来られた地域の方からＨＰを見ていると直接話しを聞くこともあるが、住民からの積極的な参加はまだ少ない。一方で、棚田が維持できないからと作業委託をしてくる高齢者もおり、ちょうど道沿いで

あったため、田んぼの学校の体験田とし、子どもたちが田植えをし、稲刈りをする様子を地域の方々へ見てもらえるようにしている。

この地域では、防府市街から近いこともあり、同居世帯は多いものの、農繁期には農業の手伝いはするが、親がリタイヤしたら農業を維持するかわからない世帯も多いようである。今後農業はやらないとしても、自らの所有する田んぼや山林を第３者へ任せることへの懸念やこだわりは、一朝一夕で変わるものではない。しかし、「ふるさと牧場」と「こぶしの会」が実践している活動の意味と棚田保全の価値や将来性を理解してもらえるまで粘り強くＰＲしていくことが必要であるとともに、「こぶしの会」そのものも棚田での生産活動を請け負える人員体制を図るため、就農希望者を受入れる長期宿泊可能な研修の場を整備することが大きな課題である。

３　当該事例の活動・成果の普及推進のポイント

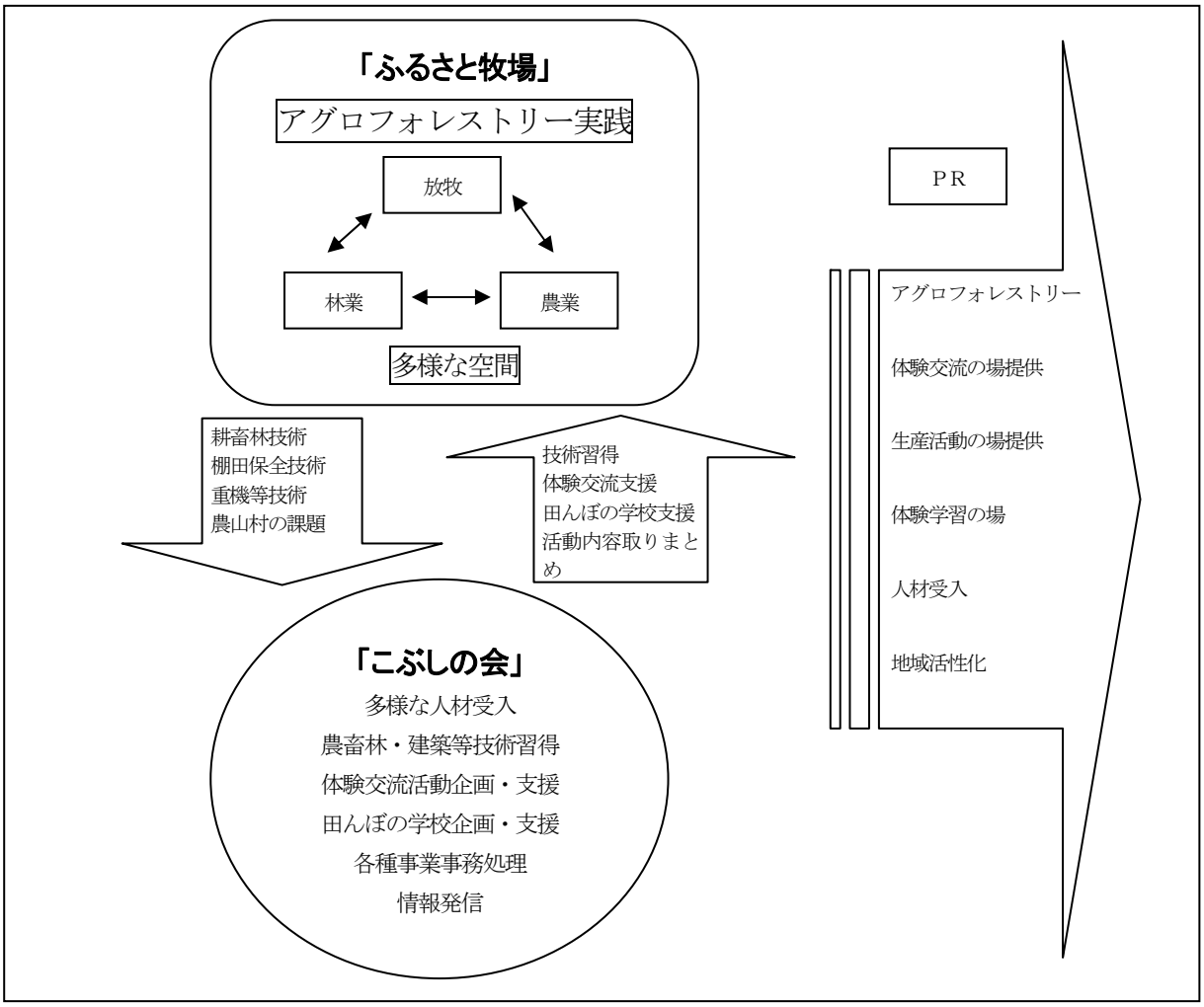
１）普及にあたっての留意点

＜行政機関との連携＞

「ふるさと牧場」と「こぶしの会」の活動は、参加者数は毎回数名から数十名の活動であり、ここで出来ることを創意工夫して実践していることから、規模は小さい。活動ＰＲも写真中心の活動紹介をＨＰ等で公開している程度である。生産基盤がしっかりしている牧場に、農業に関心のある人だけでなく、子供を遊ばせたい親子など、いろいろな思いの人が気兼ねなく集まれる場所を作り、集まる機会を継続する中で、農林業体験だけでなく教育機関をサポートする可能性も生まれている。

農村の過疎化が進み、営農集団すらまとまらない地域もあるが、ふるさとの活性化を願う熱意ある農家が頑張って農林業を継続しているケースも多いはずである。農家だけの熱意にお任せではなく、農村が持つ多面的機能を活用した教育効果を行政レベルで理解し、農林振興の部署と教育委員会がその効果を活用するために、民間のボランティアグループ等と連携することで、有意義で広範囲の体験学習が可能である。また、行政レベルの支援があることで、第二、第三の地域活動グループが出てくることも考えられ、孤立しがちな農家（受入れる側）への意識改革にもつながる。

２）実施体制図


「ふるさと牧場」
アグロフォレストリー実践
放牧
林業
農業
多様な空間
耕畜林技術
棚田保全技術
重機等技術
農山村の課題
技術習得
体験交流支援
田んぼの学校支援
活動内容取りまとめ
「こぶしの会」
多様な人材受入
農畜林・建築等技術習得
体験交流活動企画・支援
田んぼの学校企画・支援
各種事業事務処理
情報発信
ＰＲ
アグロフォレストリー
体験交流の場提供
生産活動の場提供
体験学習の場
人材受入
地域活性化